

姥捨

太宰治

そのとき、

「いいの。あたしは、きちんと仕^{しま}つたします。はじめから覚悟していたことなのです。ほんとうに、もう。」変った声で呟^{つぶや}いたので、

「それはいけない。おまえの覚悟というのは私にわかってる。ひとりで死んでゆくつもりか、でなければ、身ひとつでやけくそに落ちてゆくか、そんなところだろうと思う。おまえには、ちゃんとした親もあれば、弟もある。私は、おまえがそんな気にいるのを、知っていないながら、はいそうですかとすまして見ているわけにゆかない。」などと、ふんべつあげなことを

言っていないながら、嘉七も、ふっと死にたくなつた。

「死のうか。一緒に死のう。神さまだつてゆるして呉れる。」

ふたり、厳肅に身支度をはじめた。

あやまつた人を愛撫した妻と、妻をそのような行為にまで追いやるほど、それほど日常の生活を荒廃させてしまった夫と、お互い身の結末を死ぬことに依よつてつけようと思つた。早春の一日である。そのつきの生活費が十四、五円あつた。それを、そっくり携帯した。そのほか、ふたりの着換えの着物ありつたけ、嘉七のどてらと、かず枝の袷あわせいちまい、帯二本、それだけし

か残つてなかつた。それを風呂敷に包み、かず枝がかかえて、夫婦が珍らしく肩をならべての外出であつた。夫にはマントがなかつた。久留米くるめがすり緋の着物にハンチング、濃紺の絹の襟巻えりまきを首にむすんで、下駄だけは、白く新しかつた。妻にもコオトがなかつた。羽織も着物も同じ矢絣模様の銘仙めいせんで、うすあかい外国製の布切ぬのきれのシヨオルが、不似合いに大きくその上半身を覆つていた。質屋の少し手前で夫婦はわかれた。

真昼の荻窪の駅には、ひそひそ人が出はいりしていた。嘉七は、駅のまえにだまって立って煙草をふかしていた。きよときよと嘉七を捜し求めて、ふいと嘉七

の姿を認めるや、ほとんどころげるように駈け寄つて来て、

「成功よ。大成功。」とはしゃいでいた。「十五円も貸しやがった。ばかねえ。」

この女は死なぬ。死なせては、いけないひとだ。おれみたいに生活にお押し潰つぶされていけない。まだまだ生活する力を残している。死ぬひとではない。死ぬことを企てたというだけで、このひとの世間への申しわけが立つ筈だ。はずそれだけで、いい。この人は、ゆるされるだろう。それでいい。おれだけ、ひとり死のう。

「それは、お手柄だ。」と微笑してほめてやって、そつ

と肩を叩いてやりたく思った。「あわせて三十円じゃないか。ちよつとした旅行ができるね。」

新宿までの切符を買った。新宿で降りて、それから薬屋に走った。そこで催眠剤の大箱を一個買い、それからほかの薬屋に行つて別種の催眠剤を一箱買った。かず枝を店の外に待たせて置いて、嘉七は笑いながらその薬品を買い求めたので、別段、薬屋にあやしまれることはなかつた。さいごに三越にはいり、薬品部に行き、店の雑沓ゆえに少し大胆になり、大箱を二つ求めた。黒眼がち、まじめそうな細面の女店員が、ちらと狐疑の皺を眉間に浮べた。いやな顔をしたのだ。嘉

七も、はっ、となった。急には微笑も、つくれなかった。薬品は、冷く手渡された。おれたちのうしろ姿を、背伸びして見ている。それを知っていながら、嘉七は、わざとかず枝にぴったり寄り添うて人ごみの中を歩いた。自身こんな平気で歩いていても、やはり、人から見ると、どこか異様な影があるのだ。嘉七は、かなしいと思った。三越では、それからかず枝は、特売場で白足袋しろたびを一足買い、嘉七は上等の外国煙草を買って、外へ出た。自動車に乗り、浅草へ行つた。活動館へは行って、そこでは荒城の月という映画をやっていた。さいしよ田舎の小学校の屋根や柵さくが映されて、小供の

唱歌が聞えて来た。嘉七は、それに泣かされた。

「恋人どうしはね、」嘉七は暗闇のなかで笑いながら妻に話しかけた。「こうして活動を見ていながら、こ
うやって手を握り合っているものだそうだ。」ふびん
さに、右手でもってかず枝の左手をたぐり寄せ、その
うえに嘉七のハンチングをかぶせてかくし、かず枝の
小さい手をぐつと握ってみたが、さすが流星にかかる苦しい
立場に置かれて在る夫婦の間では、それは、不潔に感
じられ、おそろしくなつて、嘉七は、そつと手を離し
た。かず枝は、ひくく笑った。嘉七の不器用な冗談に
笑ったのではなく、映画のつまらぬギャグに笑い興じ

ていたのだ。

このひとは、映画を見ていて幸福になれるつつましい、いい女だ。このひとを、ころしてはいけない。こんなひとが死ぬなんて、間違いだ。

「死ぬの、よさないか？」

「ええ、どうぞ。」うつとり映画を見つづけながら、ちゃんと答えた。「あたし、ひとりで死ぬつもりなんですから。」

嘉七は、女体の不思議を感じた。活動館を出たときには、日が暮れていた。かず枝は、すしを食いたい、と言いだした。嘉七は、すしは生臭なまぐさくて好きでなかつ

た。それに今夜は、もう少し高価なものを食いたかった。
「すしは、困るな。」

「でも、あたしは、たべたい。」かず枝に、わがままの
美德を教えたのは、とうの嘉七であった、忍従のすま
し顔の不純を例証して威張つて教えた。

みんなおれにはねかえつて来る。

すし屋で少しお酒を呑んだ。嘉七は牡蠣かきのフライを
たのんだ。これが東京での最後のたべものになるのだ、
と自分に言い聞かせてみて、流石さすがに苦笑であった。妻
は、てつかをたべていた。

「おいしいか。」

「まずい。」しんから憎々しそうにそう言って、また一つ頬張り、「ああまずい。」

ふたりとも、あまり口をきかなかつた。

すし屋を出て、それから漫才館にはいった。満員で坐れなかつた。入口からあふれるほど一ぱいのお客が押し合いへし合いしながら立って見ていて、それでも時々あはははと声をそろえて笑っていた。客たちにもまれもまれて、かず枝は、嘉七のところから、五間以上も遠くへ引き離された。かず枝は、背がひくいから、お客の垣の間から舞台を覗のぞき見するのに大苦心ていの態たいであつた。田舎くさい小女に見えた。嘉七も、客にもま

れながら、ちよいちよい背伸びしては、かず枝のその姿を心細げに追い求めているのだ。舞台よりも、かず枝の姿のほうを多く見ていた。黒い風呂敷包を胸にしっかり抱きかかえて、そのお荷物の中には薬品も包まれて在るのだが、頭をあちこち動かして舞台の芸人の有様を見ようとあせているかず枝も、ときたまふつと振りかえつて嘉七の姿を捜し求めた。ちらと互いの視線が合つても、べつだん、ふたり微笑もしなかつた。なんでもない顔をしていて、けれども、やはり、安心だった。

あの女に、おれはずいぶん、お世話になった。それ

は、忘れてはならぬ。責任は、みんなおれに在るのだ。世の中のひとが、もし、あの人を指弾しだんするならば、おれは、どんなにでもして、あのひとをかばわなければならぬ。あの女は、いいひとだ。それは、おれが知っている。信じている。

こんどのは？ ああ、いけない、いけない。おれは、笑ってすませぬのだ。だめなのだ。あのことだけは、おれは平気で居られぬ。たまらないのだ。

ゆるせ。これは、おれの最後のエゴイズムだ。倫理は、おれは、こらえることができる。感覚が、たまらぬのだ。とてもがまんができぬのだ。

笑いの波がわつと館内にひろがった。嘉七は、かず
枝に目くばせして外に出た。

「水上みなかみに行こう、ね。」その前のとしのひと夏を、水上
駅から徒歩で一時間ほど登って行き着ける谷川温泉と
いう、山の中の温泉場で過した。真実くるし過ぎた一
夏ではあったが、くるしすぎて、いまでは濃い色彩の
着いた絵葉書のように甘美な思い出にさえなっていた。
白い夕立の降りかかる山、川、かなしく死ねるように
思われた。水上、と聞いて、かず枝のからだは急に生
き生きして来た。

「あ、そんなら、あたし、甘栗を買って行かなくちや。

おばさんがね、たべたいたべたい言つてたの。」その宿の老妻に、かず枝は甘えて、また、愛されてもいたようであつた。ほとんど素人下宿のような宿で、部屋も三つしかなかつたし、内湯も無くて、すぐ隣りの大きい旅館にお湯をもらいに行くか、雨降つてるときには傘をさし、夜なら提燈ちようちんかはだか蠟燭ろうそくもつて、したの谷川まで降りていって川原の小さい野天風呂にひたらなければならなかつた。老夫婦ふたりきりで子供もなかつたようだし、それでも三つの部屋がたまにふさがることもあつて、そんなときには老夫婦てんてこまいで、かず枝も台所で手伝いやら邪魔やらしていたよう

であった。お膳にも、筋子すじこだの納豆なっとうだのついていて、宿屋の料理ではなかった。嘉七には居心地よかった。老妻が歯痛をわずらい、見かねて嘉七が、アスピリンを与えたところ、ききすぎて、てもなくとろとろ眠りこんでしまって、ふだんから老妻を可愛がつている主人は、心配そうにうろうろして、かず枝は大笑いであった。いちど、嘉七がひとり、頭をたれて宿ちかくの草むらをふらふら歩きまわって、ふと宿の玄関のほうを見たら、うす暗い玄関の階段の下の板いたの間に、老妻が小さくぺたんと坐ったまま、ぼんやり嘉七の姿を眺めていて、それは嘉七の貴い秘密のひとつになった。老

妻といつても、四十四、五の福々しい顔の上品におつとりしたひとであつた。主人は、養子らしかつた。その老妻である。かず枝は、甘栗を買い求めた。嘉七はすすめて、もすこし多く買させた。

上野駅には、ふるさとのにおいがする。誰か、郷里のひとがいないかと、嘉七には、いつもおそろしかつた。わけてもその夜は、お店の手代たなと女中が藪入りやぶいでうろつきまわっているような身なりだつたし、ずいぶん人目ひとめがはばかられた。売店で、かず枝はモダン日本の探偵小説特輯号を買い、嘉七は、ウイスキーの小瓶を買つた。新潟行、十時半の汽車に乗りこんだ。

向い合つて席に落ちついてから、ふたりはかすかに笑つた。

「ね、あたし、こんな恰好をして、おばさん変に思わないかしら。」

「かまわないさ。ふたりで浅草へ活動見にいつてその帰りに主人がよつぱらつて、水上のおばさんところに行こうつてきかないから、そのまま来ましたつて言えば、それでいい。」

「それも、そうね。」けろつとしていた。

すぐ、また言い出す。

「おばさん、おどろくでしょうね。」汽車が発車するま

では、やはり落ちつかぬ様子であった。

「よろこぶだろう。きつと。」発車した。かず枝は、ふつとこわばった顔になりきよるとプラットフォームを横目で見て、これでおしまいだ。度胸が出たのか、膝の風呂敷包をほどいて雑誌を取り出し、ペエジを繰った。

嘉七は、脚がだるく、胸だけ不快にわくわくして、薬を飲むような気持でウイスキーを口のみした。

金があれば、なにも、この女を死なせなくてもいいのだ。相手の、あの男が、もすこしはつきりした男だったら、これはまた別な形も執とれるのだ。見ちや居られ

ぬ。この女の自殺は、意味がない。

「おい、私は、いい子かね。」だしぬけに嘉七は、言い出した。「自分ばかり、いい子になろうと、しているのかね。」

声が大きかったので、かず枝はあわて、それから、眉をけわしくしかめて怒った。嘉七は、気弱く、にやにや笑った。

「だけでもね、」おどけて、わざと必要以上に声を落して、「おまえは、まだ、そんなに不仕合せじゃないのだよ。だって、おまえは、ふつうの女だもの。わるくもなければよくもない、本質から、ふつうの女だ。けれ

ども、私はちがう。たいへんな奴だ。どうやら、これは、ふつう以下だ。」

汽車は赤羽をすぎ、大宮をすぎ、暗闇の中をどんどん走っていた。ウイスキーの酔もあり、また、汽車の速度にうながされて、嘉七は能弁になっていた。

「女房にあいそをつかされて、それだからとて、どうにもならず、こうしてうろうろ女房について廻っているのは、どんなに見つともないものか、私は知っている。おろかだ。けれども、私は、いい子じゃない。いい子は、いやだ。なにも、私が人がよくて女にだまされ、そうしてその女をあきらめ切れず、女にひきずら

れて死んで、芸術の仲間たちから、純粹だ、世間の人
たちから、気の弱いよい人だった、などそんないい加
減な同情を得ようとしているのではないのだよ。おれ
は、おれ自身の苦しみに負けて死ぬのだ。なにも、お
まえのために死ぬわけじゃない。私にも、いけないと
ころが、たくさんあったのだ。ひとに頼りすぎた。ひ
とのちからを過信した。そのことも、また、そのほか
の恥ずかしい数々の私の失敗も、私自身、知っている。
私は、なんとかして、あたりまえのひとの生活をした
くて、どんなに、いままで努めて来たか、おまえにも、
それは、少しわかっていないか。わら一本、それにす

がって生きていたのだ。ほんの少しの重さにもその藁わらが切れそうで、私は一生懸命だったのに。わかっているだろうね。私が弱いのではなくて、くるしみが、重すぎるのだ。これは、愚痴だ。うらみだ。けれども、それを、口に出して、はつきり言わなければ、ひとは、いや、おまえだって、私の鉄面皮の強さを過信して、あの男は、くるしいくるしい言っただって、ポオズだ、身振りだ、と、軽く見ている。」

かず枝は、なにか言いだしかけた。

「いや、いいんだ。おまえを非難しているんじゃないのです。おまえは、いいひとだ。いつでも、おまえは、

素直だった。言葉のままに信じたひとだ。おまえを非難しようとは思わない。おまえよりもつともつと学問があり、ずいぶん古い友だちでも、私の苦しさを知らなかった。私の愛情を信じなかった。むりもないのだ。私は、つまり、下手だったのさ。」そう言ってやっつて微笑したら、かず枝は一瞬、得意になり、

「わかりました。もう、いいのよ。ほかのひとに聞えたら、たいへんじゃないの。」

「なんにも、わかっていないんだなあ。おまえには、私がつぼどばかに見えているんだね。私は、ね、いま、自分でいい子になろうとしているところが、心の

どこかの片隅に、やっぱりひそんでいるのではないかしら、とそれで苦しんでいるのだよ。おまえと一緒に、なって六、七年にもなるけれど、おまえは、いちども、いや、そんなことでおまえを非難しようとは思わない。むりもないことなのだ。おまえの責任ではない。」

かず枝は聞いていなかった。だまって雑誌を読みはじめていた。嘉七は、いかめしい顔つきになり、真暗い窓にむかって独りごとのように語りつづけた。

「冗談じゃないよ。なんで私がいい子なものか。人は、私を、なんと言っているか、嘘つきの、なまけものの、うぬぼ自惚れやの、ぜいたくやの、女たらしの、そのほか、

まだまだ、おそろしくたくさん悪い名前をもらっている。けれども、私は、だまっていた。一ことの弁解もしなかった。私には、私としての信念があったのだ。けれども、それは、口に出して言っちゃいけないことだ。それでは、なんにもならなくなるのだ。私は、やっぱり歴史的使命ということを考える。自分ひとりの幸福だけでは、生きて行けない。私は、歴史的に、悪役を買おうと思った。ユダの悪が強ければ強いほど、キリストのやさしさの光が増す。私は自身を滅亡する人種だと思っていた。私の世界観がそう教えたのだ。強烈なアンチテエゼを試みた。滅亡するものの悪をエム

フアサイズしてみせればみせるほど、次に生れる健康の光のばねも、それだけ強くはねかえって来る、それを信じていたのだ。私は、それを祈っていたのだ。私ひとりの身の上は、どうなってもかまわない。反立法としての私の役割が、次に生れる明朗に少しでも役立つば、それで私は、死んでもいいと思っていた。誰も、笑って、ほんとうにしないかも知れないが、実際それは、そう思っていたものだ。私は、そんなばかなのだ。私は、間違っていたかも知れないね。やはり、どこかで私は、思いあがっていたのかも知れないね。それこそ、甘い夢かも知れない。人生は芝居じゃないのだから

らね。おれは敗けてどうせ近く死ぬのだから、せめて君だけでも、しつかりやって呉れ、という言葉は、これは間違いかも知れないね。一命すてて創った屍臭ししゅうふんぷんのごちそうは、犬も食うまい。与えられた人こそ、いいめいわくかも知からない。われひと共に榮えるのでなければ、意味をなさないのかも知れない。」窓は答える筈はなかつた。

嘉七は立つて、よろよろトイレットのほうへ歩いていった。トイレットへはいつて、扉をきちんとしてから、ちよつと躊躇ちゅうちよして、ひたと両手合せた。祈る姿であつた。みじんも、ポオズでなかつた。

水上駅に到着したのは、朝の四時である。まだ、暗かった。心配していた雪もたいてい消えていて、駅のもの蔭に薄鼠いろして静かにのこっているだけで、このぶんならば山上の谷川温泉まで歩いて行けるかも知れないと思つたが、それでも大事をとつて嘉七は駅前の自動車屋を叩き起した。

自動車がぐねぐね電光型に曲折しながら山をのぼるにつれて、野山が闇の空を明るくするほど真白に雪に覆われているのがわかつて来た。

「寒いよね。こんなに寒いと思わなかったわ。東京では、もうセル着て歩いているひとだつてあるのよ。」運

転手にまで、身なりの申しわけを言っていた。「あ、そこを右。」

宿が近づいて、かず枝は活気を呈して来た。「きつと、まだ寝ていることよ。」こんどは運転手に、「ええ、もすこしさき。」

「よし、ストップ。」嘉七が言った。「あとは歩く。」そのさきは、路が細かった。

自動車を棄てて、嘉七もかず枝も足袋たびを脱ぎ、宿まで半丁ほどを歩いた。路面の雪は溶けかけたままあやうく薄く積っていて、ふたりの下駄をびしょ濡れにした。宿の戸を叩こうとすると、すこしおかれて歩いて

来たかず枝はすつと駈け寄り、

「あたしに叩かせて。あたしが、おばさんを起すのよ。」手柄を争う子供に似ていた。

宿の老夫婦は、おどろいた。謂いわば、静かにあわてていた。

嘉七は、ひとりさつきと二階にあがって、まえのとの夏に暮した部屋にはいり、電燈のスイッチをひねった。かず枝の声が聞えて来る。

「それがねえ、おばさんのところに行こうって、きかないのよ。芸術家って、子供ね。」自身の嘘に気がついていないみたいにはしゃいでいた。東京はセル、をま

と言った。

そつと老妻が二階へあがって来て、ゆつくり部屋の
雨戸を繰りあげながら、

「よく来たねえ。」

と一こと言った。

そとは、いくらか明るくなつていて、まっ白な山腹
が、すぐ眼のまえに現われた。谷間を覗のぞいてみると、
もやもや朝霧の底に一条の谷川が黒く流れているのも
見えた。

「おそろしく寒いね。」嘘である。そんなに寒いとは思
わなかったのだが、「お酒、のみたいな。」

「だいじょうぶかい？」

「ああ、もうからだは、すっかりいいんだ。ふとつたろう。」

そこへかず枝が、大きい火燧こたつを自分で運んで持って来た。

「ああ、重い。おばさん、これ、おじさんのを借りたわよ。おじさんが持っていてもいいと言ったの。寒くって、かなやしない。」嘉七のほうに眼もくれず、ひとりで異様にはしゃいでいた。

ふたりきりになると急に真面目になり、

「あたし、疲れてしまいました。お風呂へは行って、

それから、ひとねむり仕様と思うの。」

「したの野天風呂に行けるかしら。」

「ええ、行けるそうです。おじさんたちも、毎日はいりに行ってるんですって。」

主人が大きい藁わらぐつをはいて、きのう降りつもったばかりの雪を踏みかため踏みかため路をつくってくれて、そのあとから嘉七、かず杖がついて行き、薄明の谷川へ降りていった。主人が持参した藁こぎのうえに着物を脱ぎ捨て、ふたり湯の中^{なか}にからだを滑り込ませる。かず杖のからだは、丸くふとついていた。今夜死ぬる物とは、どうしても、思えなかった。

主人がいなくなつてから、嘉七は、

「あの辺かな？」と、濃い朝霧がゆっくり流れている
白い山腹を顎でしゃくつてみせた。

「でも、雪が深くて、のぼれないでしょう？」

「もつと下流がいいかな。水上の駅のほうには、雪が
そんなになかつたからね。」

死ぬる場所を語り合っていた。

宿にかえると蒲団ふとんが敷かれていた。かず枝は、すぐ
それにもぐりこんで雑誌を読みはじめた。かず枝の蒲
団の足のほうに、大きい火燵がいれられていて、温か
そうであつた。嘉七は、自分のほうの蒲団は、まくり

あげて、テエブルのまえにあぐらをかき、火鉢にしが
みつきながら、お酒を呑んだ。さかなは、かんづめ 鐘詰の蟹と、
干椎茸ほししいたけであつた。林檎りんごもあつた。

「おい、もう一晩のばさないか？」

「ええ、」妻は雑誌を見ながら答えた。「どうでも、い
いけど。でも、お金たりなくなるかも知れないわよ。」
「いくらのことつてんだい？」そんなことを聞きながら、
嘉七は、つくづく、恥かしかつた。

みれん。これは、いやらしいことだ。世の中で、い
ちばんだらしなことだ。こいつはいけない。おれが、
こんなにくすぐずしているのは、なんのことはない、

この女のからだを欲しがっているせいではなからうか。

嘉七は、閉口であった。

生きて、ふたたび、この女と暮して行く気はないのか。借錢、それも、義理のわるい借錢、これをどうする。汚名、半気がいととしての汚名、これをどうする。病苦、人がそれを信じて呉れない皮肉な病苦、これをどうする。そうして、肉親。

「ねえ、おまえは、やっぱり私の肉親に敗れたのだね。どうも、そうらしい。」

かず枝は、雑誌から眼を離さず、口早に答えた。

「そうよ、あたしは、どうせ気にいられないお嫁よ。」

「いや、そうばかりは言えないぞ。たしかにおまえにも、努力の足りないところがあつた。」

「もういいわよ。たくさんよ。」雑誌をほうりだして、「理くつばかり言つてるのね。だから、きらわれるのよ。」

「ああ、そうか。おまえは、おれを、きらいだったのだね。しつれいしたよ。」嘉七は、酔漢みたいな口調で言つた。

なぜ、おれは嫉妬しどしないのだろう。やはり、おれは、自惚うぬぼれやなのであろうか。おれをきらう筈がない。それを信じているのだろうか。怒りさえない。れいのそ

のひとが、あまり弱すぎるせいであろうか。おれのこ
んな、ものの感じかたをこそ、倨傲きよぼうというのではなか
ろうか。そんなら、おれの考えかたは、みなだめだ。
おれの、これまでの生きかたは、みなだめだ。むりも
ないことだ、なぞと理解せず、なぜ単純に憎むことが
できないのか。そんな嫉妬こそ、つつましく、美しい
じゃないか。重ねて四つ、という憤怒ふんぬこそ、高く素直
なものではないか。細君にそむかれて、その打撃のた
めにのみ死んでゆく姿こそ、清純の悲しみではないか。
けれども、おれは、なんだ。みれんだの、いい子だの、
ほとけづらだの、道徳だの、借錢だの、責任だの、お

世話になつただの、アンチエゼだの、歴史的義務だの、肉親だの、ああいけない。

嘉七は、棍棒こんぼうふりまわして、自分の頭をぐしやと叩きつぶしたく思うのだ。

「ひと寝いりしてから、出発だ。決行、決行。」

嘉七は、自分の蒲団をどたばたひいて、それにもぐつた。

よほど酔っていたので、どうにか眠れた。ぼんやり眼がさめたのは、ひる少し過ぎで、嘉七は、わびしさに堪たえられなかった。はね起きて、すぐまた、寒い寒いを言いながら、下のひとに、お酒をたのんだ。

「さあ、もう起きるのだよ。出発だ。」

かず枝は、口を小さくあけて眠っていた。きよとんと眼をひらいて、

「あ、もう、そんな時間になったの？」

「いや、おひるすこしすぎただけだが、私はもう、かなわん。」

なにも考えたくなかった。はやく死にたかった。

それから、はやかった。このへんの温泉をついでにまわってみたいからと、かず枝に言わせて、宿を立った。空もからりと晴れていたし、私たちはぶらぶら歩いて途中のけしきを見ながら山を下りるから、と自動

車をことわり、一丁ほど歩いて、ふと振りむくと、宿の老妻が、ずつとうしろを走つて追いかけて来ていた。

「おい、おばさんが来たよ。」嘉七は不安であった。

「これ、なあ、」老妻は、顔をあからめて、嘉七に紙包を差し出し、「真綿まわただよ。うちで紡つむいで、こしらえた。何もないのでな。」

「ありがとう。」と嘉七。

「おばさん、ま、そんな心配して。」とかず枝。何か、ふたり、ほつとしていた。

嘉七は、さつさと歩きだした。

「おだいじに、行きなよ。」

「おばさんもお達者で。」うしろでは、まだ挨拶していた。嘉七はくるり廻れ右して、

「おばさん、握手。」

手をつよく握られて老妻の顔には、気まり悪さと、それから恐怖の色まであらわれていた。

「酔ってるのよ。」かず枝は傍から註釈した。

酔っていた。笑い笑い老妻とわかれ、だらだら山を下るにしたがって、雪も薄くなり、嘉七は小声で、あそこか、ここか、とかず枝に相談をはじめた。かず枝は、もつと水上みなかみの駅にちかいほうが、淋さびしくなくてよい、と言った。やがて、水上のまちが、眼下にくろく

展開した。

「もはや、ゆうよはならん、ね。」嘉七は、陽気を装うて言つた。

「ええ。」かず枝は、まじめにうなずいた。

路の左側の杉林に、嘉七は、わざとゆっくりはいつていった。かず枝もつづいた。雪は、ほとんどなかつた。落葉が厚く積つていて、じめじめぬかつた。かまわず、ずんずん進んだ。急な勾配こうばいは這つてのぼつた。死ぬことにも努力が要る。ふたり坐れるほどの草原を、やっと捜し当てた。そこには、すこし日が当つて、泉もあつた。

「ここにしよう。」疲れていた。

かず枝はハンケチを敷いて坐って嘉七に笑われた。かず枝は、ほとんど無言であった。風呂敷包から薬品をつぎつぎ取り出し、封を切った。嘉七は、それを取りあげて、

「薬のことは、私でなくちやわからない。どれどれ、おまえは、これだけのめばいい。」

「すくないのねえ。これだけで死ねるの？」

「はじめのひとは、それだけで死ねます。私は、しじゅうのんでいるから、おまえの十倍はのまなければいけないのです。生きのこつたら、めもあてられんからな

あ。」生きのこつたら、牢屋だ。

けれどもおれは、かず枝に生き残らせて、そうして卑屈な復讐をとげようとしているのではないか。まさか、そんな、あまつたるい通俗小説じみた、——腹立たしくさえなつて、嘉七は、てのひらから溢れる^{あふ}ほどの錠剤を泉の水で、ぐっ、ぐつとのんだ。かず枝も、下手な手つきで一緒にのんだ。

接吻^{せつぶん}して、ふたりならんで寝ころんで、

「じゃあ、おわかれだ。生き残つたやつは、つよく生きるんだぞ。」

嘉七は、催眠剤だけでは、なかなか死ねないことを

知っていた。そつと自分のからだを崖がけのふちまで移動させて、兵古帯へこおびをほどき、首に巻きつけ、その端を桑くわに似た幹にしぼり、眠ると同時に崖から滑り落ちて、そうしてくびれて死ぬる、そんな仕掛けにして置いた。まえから、そのために崖のうえのこの草原を、とくに選定したのである。眠った。ずるずる滑っているのかすかに意識した。

寒い。眼をあいた。まっくらだった。月かげがこぼれ落ちて、ここは？——はつと気附いた。

おれは生き残った。

のどへ手をやる。兵古帯は、ちやんとからみついて

いる。腰が、つめたかった。水たまりに落ちていた。それでわかった。崖に沿って垂直に下に落ちず、からだが横転して、崖のうえの窪地くぼちに落ち込んだ。窪地には、泉からちよろちよろ流れ出す水がたまつて、嘉七の背中から腰にかけて骨まで凍るほど冷たかった。

おれは、生きた。死ねなかつたのだ。これは、嚴肅の事実だ。このうえは、かず枝を死なせてはならない。ああ、生きているように、生きているように。

四肢な萎えて、起きあがることさえ容易でなかつた。渾身こんしんのちからで、起き直り、木の幹に結びつけた兵古帯をほどいて首からはずし、水たまりの中にあぐらを

かいて、あたりをそつと見廻した。かず枝の姿は、無かった。

這いまわって、かず枝を捜した。崖の下に、黒い物を認めた。小さい犬ころのようにも見えた。そろそろ崖を這い降りて、近づいて見ると、かず枝であった。その脚をつかんでみると、冷たかった。死んだか？自分の手のひらを、かず枝の口に軽くあてて、呼吸をしらべた。無かった。ばか！死にやがった。わがままなやつだ。異様な憤怒で、かつとなった。あらあらしく手首をつかんで脈をしらべた。かすかに脈搏が感じられた。生きている。生きている。胸に手をいれて

みた。温かった。なあんだ。ばかなやつ。生きていやがる。偉いぞ、偉いぞ。ずいぶん、いとしく思われた。あれくらい分量で、まさか死ぬわけではない。ああ、あ。多少の幸福感を以て、かず枝の傍に、仰向に寝ころがった。それ切り嘉七は、また、わからなくなった。

二度目にめがさめたときには、傍のかず枝は、ぐうぐう大きな躰いびきをかいていた。嘉七は、それを聞いていながら、恥ずかしいほどであった。丈夫なやつだ。

「おい、かず枝。すっかりしろ。生きちやった。ふたりとも、生きちやった。」苦笑しながら、かず枝の肩をゆすぶった。

かず枝は、安楽そうに眠りこけていた。深夜の山の杉の木は、によきによき黙つてつつ立つて、尖とがった針こずえの梢こずえには、冷い半月がかかつていた。なぜか、涙が出た。しくしく鳴咽おえつをはじめた。おれは、まだまだ子供だ。子供が、なんでこんな苦勞をしなければならぬのか。

突然、傍のかず枝が、叫び出した。

「おばさん。いたいよう。胸が、いたいよう。」笛の音に似ていた。

嘉七は驚駭きょうがくした。こんな大きな声を出して、もし、誰か麓ふもとの路を通るひとにでも聞かれたら、たまった

ものでないと思つた。

「かず枝、ここは、宿ではないんだよ。おばさんなんていないのだよ。」

わかる筈はずがなかつた。いたいよう、いたいようと叫びながら、からだを苦しげにくねくねさせて、そのうちにころころ下にころがっていった。ゆるい勾配こうはいが、麓の街道までもかず枝のからだをころがして行くように思われ、嘉七も無理に自分のからだをころがしてそのあとを追つた。一本の杉の木にさえぎ止められ、かず枝は、その幹にまつわりついて、

「おばさん、寒いよう。火燧こたつもつて来てよう。」と高く

叫んでいた。

近寄つて、月光に照されたかず枝を見ると、もはや、人の姿ではなかった。髪は、ほどけて、しかもその髪には、杉の朽葉が一ぱいついて、獅子の精の髪のように、やまうば山姥の髪のように、荒く大きく乱れていた。

すっかりしなければ、おれだけでも、すっかりしなければ。嘉七は、よろよろ立ちあがつて、かず枝を抱きかかえ、また杉林の奥のほうへ引きかえそうと努めた。つんのめり、は這いあがり、ずり落ち、木の根にすがり、土を搔かき搔き、少しずつ少しずつかず枝のからだを林の奥へ引きずりあげた。何時間、そのような、

虫の努力をつづけていたろう。

ああ、もういやだ。この女は、おれには重すぎる。いいひとだが、おれの手にあまる。おれは、無力の間だ。おれは一生、このひとのために、こんな苦勞をしなければ、ならぬのか。いやだ、もういやだ。わかれよう。おれは、おれのちからで、尽せるところまで尽した。

そのとき、はつきり決心がついた。

この女は、だめだ。おれにだけ、無際限にたよっている。ひとから、なんと言われたっていい。おれは、この女とわかれる。

夜明けが近くなって来た。空が白くなりはじめたのである。かず枝も、だんだんおとなしくなってきた。朝霧が、もやもや木立に充満している。

単純になろう。単純になろう。男らしさ、というこの言葉の単純性を笑うまい。人間は、素朴に生きるより、他に、生きかたがないものだ。

かたわらに寝ているかず枝の髪の毛の、杉の朽葉を、一つ一つたんねんに取ってやりながら、

おれは、この女を愛している。どうしていいか、わからないほど愛している。そいつが、おれの苦悩のはじまりなんだ。けれども、もう、いい。おれは、愛し

ながら遠ざかり得る、何かしら強きを得た。生きて行くためには、愛をさえ犠牲にしなければならぬ。なんだ、あたりまえのことじゃないか。世間の人は、みんなそうして生きている。あたりまえに生きるのだ。生きてゆくには、それよりほかに仕方がない。おれは、天才でない。気がいいじゃない。

ひるすこし過ぎまで、かず枝は、たつぷり眠った。そのあいだに、嘉七は、よろめきながらも自分の濡れた着物を脱いで、かわかし、また、かず枝の下駄を捜しまわったり、薬品の空箱を土に埋めたり、かず枝の着物の泥をハンケチで拭きとったり、その他たくさん

の仕事をした。

かず枝は、めをさまして、嘉七から昨夜のことをいろいろ聞かされ、

「とうさん、すみません。」と言って、ぴよこんと頭をさげた。嘉七は、笑った。

嘉七のほうは、もう歩けるようになっていたが、かず枝は、だめであつた。しばらく、ふたりは坐つたまま、きょうこれからのことを相談し合つた。お金は、まだ拾円ちかくのこつていた。嘉七は、ふたり一緒に東京へかえることを主張したが、かず枝は、着物もひどく汚れているし、とてもこのままでは汽車に乗れな

い、と言い、結局、かず枝は、また自動車で谷川温泉へかえり、おばさんに、よその温泉場で散歩して転んで、着物を汚したとか、なんとか下手へたな嘘を言つて、嘉七が東京にさきにかえつて着換えの着物とお金を持つてまた迎えに来るまで、宿で静養している、ということに手筈てはずがきまつた。嘉七の着物がかわいたので、嘉七はひとり杉林から脱けて、水上のまちに出て、せんべいとキャラメルと、サイダーを買い、また山に引きかえして来て、かず枝と一緒にたべた。かず枝は、サイダーを一口のんで吐いた。

暗くなるまで、ふたりでいた。かず枝が、やっとど

うにか歩けるようになって、ふたりこつそり杉林を出た。かず枝を自動車に乗せて谷川にやつてから、嘉七は、ひとりで汽車で東京に帰った。

あとは、かず枝の叔父に事情を打ち明けて一切をたのんだ。無口な叔父は、

「残念だなあ。」

といかにも、残念そうにしていた。

叔父がかず枝を連れてかえつて、叔父の家に引きとり、

「かず枝のやつ、宿の娘みたいに、夜寝るときは、亭主とおかみの間に蒲団ひかせて、のんびり寝ていた。

おかしなやつだね。」と言って、首をちぢめて笑った。他には、何も言わなかつた。

この叔父は、いいひとだつた。嘉七がはつきりかず枝とわかれてからも、嘉七と、なんのこだわりもなく酒をのんで遊びまわつた。それでも、時おり、

「かず枝も、かあいそうだね。」

と思ひ出したようにふつと言ひ、嘉七は、その都度つど、心弱く、困つた。

底本…「太宰治全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年9月27日第1刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6

月刊行

入力…柴田卓治

校正…小林繁雄

1999年9月6日公開

2005年10月20日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。